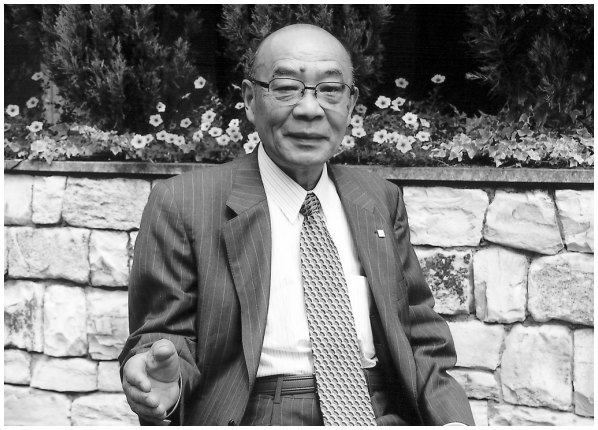
閑話独言

「背中にガマン」50周年

山形商工会議所常議員
武　田　義　弘



昭和30年代当時の婚礼（会員諸氏も記憶にあるでしょうが）は、まず花嫁さんの家で立ち振る舞いが行われた。これからお嫁にいきます、これまで育ててくれてありがとうございます、という感謝の気持ちをこめての儀式でしょう。そして翌日、両家が一堂に会し、お謡いさんの差配によって披露の宴が開かれておりました。

専門の結婚式場などというものはなく、会場は魚屋さんの２階、公民館、ちょっと豪華に護国神社社務所、平和記念会館、三浦記念会館でした。

葬儀も寺から祭壇を借用し、町内の古老の差配を受けて、近所の方々が役割を分担し自宅などで行ったものです。懐かしくもありますが…。冬は寒く、夏は暑く大変でした。

私の家は、もともと漆塗りを家業としておりました。庄内に漆の山、自宅敷地に工場を持っておったのですが、漆茶碗を使ってくださる時代ではなくなり、さて、いかなることになるやら、と先代（父・武田有弘社長）が思案している折、碁打ち仲間で近所（山形市木の実小路）に居住まいしていた大久保傳蔵山形市長が、「君、都会では互助会といって会員制で冠婚葬祭を請け負っている制度があり、若い人の関心を呼んでいるそうだ、やってみないか」と勧めてくれ、「それでは」と先代が思い切って、「山形県新生活互助会」を立ち上げたのです。創立は昭和37（1962）年７月７日、織姫彦星が年に1度出会う七夕にあやかりたい、との願いを込めたのでしょう。私は20歳でした。

創業当時、山形には冠婚葬祭に一貫したサービスを提供するところはなく、披露宴会場に出張し、挙式から料理、衣装、写真撮影、引き出物まで提供する互助会は評判となって会員は順調に増え、７年後に直営の総合結婚式場「平安閣」、昭和58年、現在地（卸売市場跡地）に「パレス平安」（現パレスグランデール）をオープンし、今日に至っております。

葬儀の方は、昭和40年に山形商工会議所の当時の会頭市村利兵衛氏の勧めで、「（有）山形葬祭社」を譲り受けました。当時、霊柩（寝台）車を運行するのは免許制でした。平成10年に社名を「（株）平安典礼」、13年に県内で最初に総合葬祭場「セレモニーホール山形」を開堂しました。

そりゃあ、いろんなことがありました。同じ造りが並ぶ山形市の市営住宅に病院からご遺体を運んだが、間違って別のお宅だったり、「すし屋の主人が亡くなった」との偽電話で駆けつけたり。その時は同業者と鉢合わせになり、互いに顔を見合わせ唖然としました。ご主人はだれかに恨みでも持たれていたのでしょうか…。

つくづく思うのだが、時代は淘汰の名人であり変化に適応できない企業は生き残れない。裏を返せば、世の中の新たなニーズに先手を打って応じることができれば、「100年企業」にもなれる、ということであり、エターナル・ストーリー（終わりなき物語）を紡いでいくことができる。

創業者である父（先代）は、新たな世界を切り開き64歳で生涯を終えた。引き継いだ私は、今年創業50周年をみなさんに祝ってもらうことができた。私は今、会員の絆をより強固にし、婚活、福祉の分野に踏み出しました。

「片手にソロバン、片手にロマン、背中にガマン」―私が大切にしている言葉です。起業を志す若い諸君に「人・物・金」に「情熱・情報」を添えてこの言葉を贈ります。

ジョイングループ　代表取締役社長